

お わ り に

今回、作成に携わっていただいた先生方は、MAP県内指導者として各種講習会の指導に当たられたり、教科にMAPの手法を積極的に取り入れ実践されたりと、いずれもMAPについての知識や指導法を十分確立されている先生方です。作成委員の先生方には、たくさんの時間をかけて協議していただきましたが、「MAPの先駆者」ともいえる先生方をしてなお、この事例集を作成するに当たっては、どのように伝えたら初めてMAPに触れる先生方にも伝わるのかを悩み、予定した作成委員会だけでは終わらず、臨時に作成委員会を開催するなどして、検討に検討を重ねてまいりました。

MAPにマニュアルはない

なぜMAPの手法を伝えることは難しいのでしょうか。一つには体験学習法であることから、体験を通してでないとなんか伝えにくいということが挙げられます。また、MAPには、体験活動の指導における定まった手順といったものはありませんので、場面に応じた様々な対応が求められます。それらのことを、この限られた紙面の中でいかに伝えるのか、その難しさがありました。

MAPで大切にしているのは、児童生徒の反応に対して、何を、いつ、どのように児童生徒に返してあげるのが最も効果的であるのかを常に念頭に置いて、その場面に応じて教師が支援することです。そのためには、児童生徒の様子を細やかに観察して、何気なく発する言葉や行動に注意を払い、その児童生徒に必要な教師の働き掛けは何か、何を気付かせたいのかなどを常に教師が明確にしておく必要があります。

要するに、児童生徒の一人一人に添った人数分の対応が必要になるのです。

MAPは特別なことではない

MAPの手法を教科に取り入れるということは、決して特別なことではありません。本書の中においても何度となく紹介しているとおり、PAの基本的な考えである「フルバリューコントラクト」や「チャレンジバイチョイス」、「体験学習サイクル」などは、実は普段先生方が児童生徒に対して実践していることなのです。

ただ、授業の目的は何なのか、児童生徒にどんな学力を身に付けさせたいのかなどを明確にして、そのためには児童生徒のどんな発言に耳を傾け、何を観て、そこから何を感じるのか、正に児童生徒の発するサインをいかに先生方がキャッチするのか、その手法を身に付け、先生方自身の感性を高めることこそが実はMAPの目的なのです。

今回は、教科への効果的導入をねらいとした事例集の作成ということで、作成委員の先生方にも戸惑いが多かったのではないのでしょうか。また、限られた時間や紙面の中で思いが十分に伝わらない歯がゆさもあったことと思います。

本事例集は、決して完成されたものではありません。この事例集をきっかけに、MAPに興味をもたれた先生方が増え、それぞれがMAPの手法を生かした授業を工夫し（目標設定）、実践（体験）を通して学びが深まり、互いに共有し合うこと（振り返り、一般化）が本当のMAPだと思います。そのためにも、本事例集をどんどん活用していただき、先生自らがご自分の体験学習サイクルを回して行ってほしいと願っております。